



「和解の務め」音信

(19-2)

May. 2019

Ministry of Reconciliation in South Africa

金煥・朴貞玉

「神はキリストによって私たちをご自分と和解させ、また和解の務めを私たちに与えてくださいました」(Ⅱコリント 5:18)

主の復活を記念するイースターが過ぎ、日本では益々春の色が濃くなる時かと思えます。皆様のお祈りとご愛に支えられ、南アフリカでの生活と奉仕が続けられることを深く感謝しております。

1. アメリカへの訪問

私たちは去る4月5日から18日までアメリカを訪問してまいりました。4月4日午後、ヨハネスブルク国際空港を出発して、アメリカのワシントン・ダレス国際空港に着いたのは4月5日午前でした。そこから国内線に乗り替えピッツバーグまで、さらにピッツバーグから一時間半離れているスプリングバリー共同体まで行きました。スプリングバリー共同体は、再洗礼派の中でもフッター派と関りをもっているブルダホフ (Brudershof) 系の共同体です。再洗礼派は宗教改革の時代、徹底的な改革を追求しながら、国家と教会の完全な分離、無抵抗・平和主義、キリストへの徹底的な従順、信仰告白者への浸水洗礼を主張したグループです。そして彼らは初代エルサレム教会に倣い、共同生活を営んでいます。私たちが今回尋ねた共同体は都市から離れた田舎に一つの村を形成しておりました。幼児から高齢者まで一〇〇人程度の人々が共に生活する様子は誠に驚きでした。以前は農業が主な生計の手段でしたが、近頃、子どもたちのための木材の遊び道具と障害者のための機材を製作するビジネスができ、皆が働ける仕事でできたということでした。全世界に20

2. バンクーバーでの奉仕

4月10日午後、その共同体から離れ、11日ワシントン州のバンクーバーに着きました。そこで50年ぶりに高校時代の同期生のC長老と再会しました。彼の紹介でこの韓国入長老教会が特別集会として私たちを招いてくれたのです。金曜日の夜、土曜日の朝と夜、聖日の朝、4回に渡りメッセージを宣べ伝えました。来年、設立40周年を迎えるこの教会に宣教を目指す教会となることを心より語りました。聖日礼拝の後、教会の牧師と信徒たちと昼食を含めた暖かい交わりを頂き、その後、私たちは教会を去りました。

3. シアトルでの再会

聖日の夕方、親友のC長老が予め連絡しておいた、シアトル地域の高校同期生たち3人が加わり、50年ぶりの小さな同窓会のような夕食会を持ちました。高校時代、紅顔の少年・少女だった同期生たちが今は半白の年寄りになって異国の地で再会するということは何という不思議なことでしょうか。更に、東京キリスト教学園で一緒に生活したことのある、K牧師、P牧師もその翌日再会することができました。

5. 祈りの課題

覚えてお祈りしてください。幸いです。

①感謝…主の御恵みの内にアメリカへの訪問を終え、無事に任地に復帰できたこと。

②5月20日からまたここを離れ、韓国を経由して日本に戻ります。その主な目的はビザ再更新です。ビザの延長が順調に許可され、南アフリカにおける和解の務めが継続できるように。

③7月15日から19日まで韓国で行われるパウロ宣教会の全体修養会が祝福されるように。

④ポチエフストロム・ニュービギニング・センターの中に、青少年及び青年たちのための国民高等学校を始めようとしております。それが着実に準備され、順調にスタートできるように。

皆様のご平安を心よりお祈り致します。主の小さいしもべたち、
金煥・貞玉より

4. イースターの礼拝

私たちは4月16日、シアトルを出発し、18日、ヨハネスブルクに戻りました。またそこから車で走り、ステレンボッシュに着いたのは19日午後でした。早速20日土曜日にはフロレンスブルク村の子ども集會に、21日イースターにはドラケンシユタイン村のニューホープ・チャペルに出席しました。ニューホープ・チャペルでは、普通は30人前後の成人・子どもたちが集まりますが、イースター礼拝には48人が集まり、用意して行ったイースター・プレゼントが幾つか足りませんでした。大喜びで迎えてくれる人々の笑い顔を見ながら、決して私たちの小さな奉仕が無駄ではないことが分かりました。



イースター集會に来た子どもたち



高校時代の同期生たち

を越える同じ系列の共同体が形成され、互いに助け合っていることでした。女性たちは頭にカバーを被り、長いスカートを着て、化粧も飾りもせず、勤勉に働いていました。男性たちも素朴な衣装で与えられている仕事や課題に熱心に取り組んでいます。彼らは未だにテレビや携帯電話などを用いず、シンブルな生活をしていました。朝食と夕食は家族ごとに質素に、そして昼食は共同で食べていました。週一回、近所の人々を招いて一緒に食事するということです。集まるたびに賛美が溢れ、正に賛美の群れと言われるくらいでした。私たちも1週間彼らと一緒に働き、一緒に行動しながら、多くのことを学びました。宣教の為に、このような共同体はできないかと心の中で問い続けつつ。